

脱構築の行方と新歴史主義

齋 藤 義 徳

平成30年6月27日受理

Where the Deconstruction Should Go and the Concept of the New Historicism

Yoshinori SAITO

目 次

- I 序論
- II 本論
 - 1. デリダと形而上学批判
 - 2. 差延を捜る
 - 3. パロールとエクリチュールの関係性について
 - 4. テクスト性について
 - 5. 脱構築の問題点
 - 6. 新歴史主義批評について
 - 7. 新歴史主義の問題点
- III 結論

I 序 論

本稿の目的は、70年代に脚光を浴び、21世紀初頭のデリダ没後もいまだに注目が寄せられる脱構築と、80年代当時、新理論として一世を風靡した新歴史主義との関連性を再論証し、それぞれに起こった問題の複雑さがどこにあったのか、その拠点を措定し、かつそれを解きほぐす糸口を提供しようというものである。また、脱構築という名称を傘に、文学を理解する上で不可避であるとされてきた意味の絶対的付与に対し、デリダがどのように反駁してきたのか、その帰結を再検証するという試みでもある。さらに、新歴史主義の参入が本来的に精妙なテキストの解釈、並びに精密なテキスト批評を可能にし得たのか、という再検証の試みともなり得る。

II 本 論

1. デリダと形而上学批判

ギリシャ思想、とりわけプラトニズムにおいては、無数に変化する経験世界の背後に「イデアの世界」が絶対的、超越的に存在すると考えられていた。この存在を仮定し、それを表現する体系を仮定する態度は「ロゴス中心主義」と呼ばれ、デリダが解体しようとする対象であった。デリダの形而上学批判は、エクリチュール概念の名における、ロゴス中心主義批判であり、生きた声・現前への形而上学に内在する価値賦与の批判であった。

西欧では、印象批評以降、実体論的認識から文学批評は始まった。主体 (subject) と客体 (object) の上に形而上学的 (metaphysical) なものを置き、実体の性質、それが何であるかを明らかにしようとしてきた (*The Mirror and the Lamp* 14-50)。脱構築の仕業の一つに、あるテ

テキストが含んでいると考えられるメッセージを、単純かつ還元的な仕方では取り出す代わりに、テキストに見られる様々な決定不可能な要素を暴露すること、というものがあろう。テキストを解体するとは、不確定なもの、曖昧なもの、両義的なものをあばき出すことであり、そこに絶対性は生まれない。ロゴス中心主義の考え方であれば、見出しされる意味というのは絶対的な自分の声、それこそが真実となる。換言すれば、声そのまま脳で理解されれば、それは本当の絶対的真実、絶対的経験であると考えられていた。その歴史は、絶対的な、自分が話す声を聞きたい、である。脱構築するということは、個々のテキストが西欧の形而上学的思考の歴史的な根深さを反映する従来積み重ねられてきた主張に吸収され、かつそうした思考の代弁者となってしまふことを回避することである。何故ならば、そうすることが、厳密にしかも直接的にテキストを解体することにつながったからである。

デリダは、「言葉は全て比喩である」と言った。これは、音声中心主義の根源が言葉であることに対する問題の提起でもある。デリダの考える根源は、「現前の根源性の証明が反復可能か否かで決められる」というもの。要するに、デリダの現実という根源の分析は、現前は根源としての意味をなすためには言葉による反復・再現前が可能でなければならない。しかし言葉には、常に差延⁽¹⁾が付きまとう。何故なら、現実、世界、歴史には必ず時間が含まれるからである。従って現前と再現前の間には絶えざる時間差が生じる。故に、現前は根源の意味として働かない。つまり、根源の根源性というものはない、ということになる。デリダの現実という根源の分析では、1) 現前は、根源としての意味であるためには言葉による反復・再現前が可能でなければならない、2) 言葉は、差延をもつため、現前と再現前の間には絶えざる差異化が起こる、3) 従って、現前は根源的意味として働かない、となっている。

脱構築の考え方は、テキストを複数回読んだ

それぞれの違いを永久に書き連ね、この作業を際限なく反復する、と理解できよう。もし、絶対知がサークルの閉じた円状であれば、(デリダ自身は、この絶対知の存在を否定しているが)その円周上に、読んだという経験のいくつもの点を打ち、それぞれ隣り合った点を線で結ぶ行為を繰り返す。その線は、読みの経験が増加するごとに比例し絶えず修正を強いられる。完全な円になることはないとしても、限りなく円に近づく線形を成してくるであろうと、デリダは考えたのである。

『声と現象』以来、デリダは、さらにこのサークルの閉じた状態である閉域という概念(24)について、一つの省察にとりかかってきた。我々は、現前の形而上学の内部において、対象の現前についての知を、閉域としての絶対知として全く単純に信じてしまう。現前として、つまり絶対知における自己現前として、テキストの意味は閉じられているという概念である。この閉域は、他人の現象的な出現を同一性の有限な地平へと縮減し、形而上学を絶対知のうえに根付かせるよう強いる永続的エネルギーを産出する。そこから脱出し、テキストを脱構築する必要性はここに生じてきたのである。デリダにとって、形而上学を再び基礎づけることとは、その諸々の概念を再生させ、人が転覆させようとしているディスクールを繰り返すことであった。これが、西洋の伝統に対する一貫した脱構築のためのテキストの形而上学的な閉域からの開放へつながったのである。

ここで、確認しておきたいことは、脱構築のエネルギーは、形而上学を投げ捨てることにあるのではなかったということである。形而上学を投げ捨てたところで、代わりに何か別のもの、形而上学の他者が、同じ地位に就くだけのことである。脱構築のエネルギーは、内側から形而上学の体系の限界を解除することに専念し続けるため、このエネルギーの成果は、形而上学の体系の本来の場から当の体系を内側から突き破ることにあったと言える。そして、形而上学の体系全体に亀裂を入れることにより、脱構築の

エネルギーがもたらす内側からの突き上げは、何よりも、いわば形而上学的な対立関係の網の目を緩めることに存していたのである。

2. 差延を捜る

作品とは、様々なテキストの圧縮であるが故に、他の様々な作品の読解の痕跡を含んでいる。先行する作品の存在を証言し、それに応答する形で自らもまた特異な作品として同じ文学の空間に書き込みをおこなう。作品一般がそうであるならば、作品を対象とする批評は、なおさら強い意味で差延の影響を受けることとなる。デリダの言う「テキストそのものに絶対的、統一的意味はない」という考えは、テキストが言語の相関性のおりなす迷宮であることを意味し、故にテキストを読む、または批評する行為は、もう一つの迷宮を作り出すことになる。その迷宮は、他の反復とくさり状に繋がった別の反復から成る複雑な織物であり、仮に自分の考えをどれ程言葉にしようとも文字にしようとも、誰も理解してくれない迷宮を、ただ重ねていくだけだというのであれば、自分も理解できなかったということを確認したほうがよい、とデリダは考えたのである。デリダに言わせると、文学テキストを批評する行為とは、迷宮の上にもう一つの迷宮を重ねていくことであり、様々な決定不可能な要素を暴露することであった。形而上学では、自分の本当の声を聞いたかと思ひ、話しているのではあろうけれども、それは自分が感覚した瞬間の声ではないので悩んでいる。例えば太陽の光を浴びて暑いと感じるとき、暑いというのは、話されている言葉であり、感じたそのものではない。それは個人体験の問題であり、ある者が暑いと感じているのと同じ温度を他者が経験したからといって全ての他者が暑いと感じるとは限らない。1回のみで完全に絶対的な体験が理解できるかどうかは不確定である。それよりも、たくさんの体験をしてそのうちのどれか1つは当てはまる可能性に近づける、と言った方がより厳密に近いとデリダは考えたのである。

デリダの語る差延は、声を1回聞いただけで絶対的体験ができるとするロゴス中心主義を形而上学の閉域をめぐる一連の議論へと送り返し、ロゴスを脱構築するしかけの立役者となった。デリダは、「現前はその過去であり、その未来であり、ある未来の過去として現在を構成する」と述べている（『獣と主権者Ⅰ』276）。周知のように、デリダの差延の思想が着想を得ている理由の一つに、ソシュールが明らかにした言語システムにおける差異の構成的性格が挙げられる。言語には差異しかない、というソシュールの理論は、言語における要素の同一性の二次性を示した。それがシニフィアン（signifier）であり、シニフィエ（signified）である。シニフィアンの自由な戯れは、自在に動き回るイメージで語られたが、これらの概念は、環状に移行し合うものではなく、それらのお互いの関係は不確実であった。故にそれらはお互いに補足し合い、お互いの代わりを意識し始める。これがデリダの言う「代補」の起源である。デリダは有名な講演『差延』（1968年）の中でソシュール言語学を脱構築した。デリダがソシュールから受け取り、さらに拡張した発想は「言語は差異のネットワークである」というものである。差延は、概念および意味の絶対的な確定性を許さず、それらを絶えざるシステム上の戯れのなかに巻き込む。記号や意味のシステムは、代補の連鎖によって差延を繰り返す。この差延による意味のずれの露呈は、ある程度の確定性をもってはいるが、無限の反復またはアポカリプスをもたらす。この観点から言えば、デリダの差延はシステムを外側から転覆し破壊するのではなく、システム内の変形可能性、変態の潜勢力によって内部から変形していくエネルギーだと言ってもよい。そもそも、確固とした秩序がある、システムがあるとする前提を懐疑せず、それを引き受けてしまうことを否定することが、差延のエネルギーの源であった。この変形エネルギーから意味や概念、言語作用、記号作用全般における認識不可能性が生じる。ある概念や記号が、ある特定の意味や価値を

担っているように見えても、それはその時のシステムの一時的な結果に過ぎず、時がずれ、その都度、意味効果は組み替えられていく。要するに、確定的な意味も、また意味を確定させると考えられる確定的なコンテキストも厳密にはありえず、個々の項は絶えざる変動状態にある。そうした変動状態を確定的に捉えることは、粗雑な意味解釈や単純化でしかない。むしろ、システム内の要素は、それ自体として潜勢力と変形可能性に満ちており、他になる可能性、他性化の力に満ちたものと考えなくてはならない。

「代補」に関してだけではなく、「存在」や「現前」といった哲学上の特権的用語も、他の用語との置換の可能性なくしては機能しえない(『ポリティクス』2)。テキストがどこへ向かっているか、特にあからさまには示されることのないテキストの行き先、という問題に関するデリダの注意深い考察を鑑みれば、代補が語られるのは何ら意外ではない。デリダは、こうした代補構造を、言語外、経験、自己現前、そして最終的にはあらゆる現前的存在者のなかに読みとろうとした。これがいわゆる「現前の形而上学と批判」である。デリダの脱構築とは、現前性のもとに、再認可能な代補という他者を読み取ってゆくことで、様々な帰結を導く営みであったのである。

言語における要素の同一性の二次性は、それが他の要素と異なることによってのみ規定される。故に、差延はこのような差異を生み出すエネルギーと成り得る(19)。差延が生み出すこの差異は、それ自体はいかなるカテゴリーによっても識別されることはない。差延は、現前でも不在でもなく、自然的でも文化的でもないが、それら全ての差異を生み出すのである。差延は、もろもろの差異が認識不可能となる境界であり、そうであるが故に、階層づけられた形而上学的な対立概念を脱構築することを可能にするのである。

差延はさらに、パロールとエクリチュール、男性と女性、ロゴスとミュトス、シニフィアンとシニフィエといった対立項が識別不可能とな

る地点へとそれらを引きずり込む。故に、差延の働く場では「こうした二項の間の差異は、もはや機能しなくなる」のである(21)。従って、二項の認識不可能性は、根源的で絶対的なものを生み出しはしない。デリダは「従って、絶対的で根源的なものを決定づけると想定され得るものは、差異ではなく、異なるもの、相違なるものたち、相違なるものたちの決定可能な外在性である」という(22)。しかしデリダはこの後、差延が、文化的、社会的、生物学的、その他あらゆる客観的なカテゴリーに従って分類された差異の「認識可能な外在性」をも認識不可能にしてしまう。従って、識別可能な差異が消え去るところで肯定されるのは、そうした差異を生み出す、それ自体は識別することのできない差異である。他者をそれ自身から差異化するこの認識不可能な他者性は、他者がそれとして現前することを可能にするという条件下であっても、決して還元されることはない。この他者の他者性を構成している根幹的なものは、全ての差異ある者たちの共通の源としての差延であると言わざるを得ない。他者たちは、この意味で別の他者が認識されるために存在しているという役割そのものを共有している。そうであるとするならば、識別不可能な他者は、いかなる固有性によっても同一化されることのない共同体、すなわち識別可能な性格を持たない共同体を形成することとなる。しかし、このような共同体は現前的には存在しない、という事実を受け入れなければならない。実際、この共同体の逆説的な性格は明白であり、差延が識別不可能な差異を生み出すためにしか存在していないことを意味する。つまり、共同体の構成原理が、同時にそれを解体する原理でもあるという訳である。その一方で、差延は意味の転覆を醸成する。このことは差延を脅威的なものにし、現前性を欲する人々の中のうちなる欲望は、差延を恐れるようになる(『法の力』36)。当然ながら、人は差延の主となることはできず、むしろ両者は主権性を問い質す限界として作用するのみとなる。差延は、テキストを生み出す痕跡の戯れ

にとどまり続けなければならなかった。デリダの全てが差延に集約される訳ではなく、デリダの全てが差延から出てくるのだと言わざるを得なかったからであろう（『ポジション』107）。

言語により表現され得る究極的な姿が隠喩である。故にこの言語と隠喩には、密接な関連性がある。隠喩は、起源的な言語の持つ意味の変化を引き起こす。この場合の隠喩は修辞学的方法といった限定的な意味合いではなく、形而上学全体が一個の隠喩システムであることを意味する。言語があるということは、そこに人間が存在しているということであり、言語と存在の間には深い共属関係が語られる。しかし、隠喩は存在の思惟や真理の変形ではない。従って、存在の思惟の完全な開示はありえず、形而上学を乗り越えることは不可能なのである。そこで、忠実にハイデガーを読解するデリダは、存在ではなく差異を相続した。「絶対に根底的なものは、なにものでもない存在でなく、存在者でもなく、存在者＝存在論的差異である」（113）と述べている通りである。超越論的な、純粹で起源的な意識を成すものとは差異であろうと、デリダは言った。デリダの仕事の文脈で「差異」や「超越論的なもの」と呼ばれ得るものは、同時にその位置を哲学的伝統の中へ遡行的に引き戻す働きを演じている。差異から、差延にいたる道のりは一言で述べられはしないであろうが、こうなると、その差延でさえも形而上学的な名詞、すなわち隠喩であると言わざるを得ないのではないだろうか。差延という隠喩的呼称を受けたものは、純粹かつ固有の単一性をもたず、差延的な置き換えのなかで分散してゆくのみである。故に、エクリチュールに代表されるそれらの置き換えは、差延の実体化を極力回避しようとしてきたのである。

そもそも脱構築による形而上学批判には、対立関係の体系に、空間的差異とともに時間的差異を編み込み、再記入することも含まれていた。デリダが指示していたことは、空間と時間、質と量、力と形式、などの対立関係であったが、そうした構成要素の多くは、脱構築全体を通じ

て暗に示されているだけである。それは、形而上学的思想の蔵する根本的な対立関係のいっさいを狙いとするだけでなく、いっそう一般的に、対立関係にあるということそれ自体を狙いにしていた。ここで企てられたことは、およそ対立関係を、制限された形式での差異として、示喩的な形而上学のなかに再記入することであった。こうした経緯を考慮すれば、差延の役割は、差異が他方と同定され、再記入されるのを許可せず、またそれぞれが差異を取り返しては、それを自らのうちで再記入することなくさらなる差異へと委ねる手助けをするだけであったと言えるのかもしれない。

3. パロールとエクリチュールの関係性について

構造主義の出現は、言語システムに直接結びついてきたあらゆる領域において、あらゆる経路によって、いっさいの差異にかかわらず、普遍的考察であるエクリチュールに深く根付いたものであった。この言語システムについて、普遍的考察が問うこともせず自明としていた言語の記号的本性についての言語システムに示されていることは、デリダの主張によれば、「構造主義という現象は、言語に対する疑念の露呈に他ならない」というものであった。構造主義によって立てられた、本来ならば構造主義の出現を説明するはずの言語システムは、自らの記号的本性が「不確実・部分的・非本質的」なのではないかと、記号的本性の限界についての疑念に目覚めたのである。構造主義と脱構築、および両者の差異を定義づける様々な試みの中で、唯一共通する要素と呼べるものは、定義づけには限界があるという自覚と、両者の間に果たして差異はあるのかという疑念である。構造主義の分析は、個々の要素をその本質的価値によってではなく、それが機能している言語システム内の関係によって考察するものである。言語システムを構成するのは、そのシステム内で作用する要素間の差異と捉える。従って、構造主義が言語システムの構造を解明する際の視点

は、知覚し意図を有する主体ではなく、非人格的で、科学的な視点となる。他方、脱構築が主体の脱中心化が果たして可能かどうかを解明する際の視点は、差異が生み出すさらに厳密な結果にその操作を委ねられるのかという疑念である。それ故、この操作の被害に遭ったのは、構造主義が発動する閉じられた言語システムの可能性そのものであった。

そもそも、言語システムは全て表音文字で構成される。表音文字は音声を単に表記しただけのものであり、文字よりも音声のほうが根源的だという考えがここから誕生している。デリダ以前では、エクリチュールは、生命を持ち、魂を持つ音声の不完全な転写であると考えられていた。エクリチュールとしての書かれた文字が、パロールを離れ、それ自体で意味する世界は無視されてきたのである。このような扱いをされてきた理由に、以下の二点が挙げられよう。第一に、パロールにおいて語る主体がその場に現前しているのに対して、エクリチュールにおいては語る主体が不在である。第二に、パロールにおいてはそれを取り巻く言語外的なコンテキストも言語内的なコンテキストもオリジナルな状態で現前しているのに対し、エクリチュールでは、それらは不在である。それ故エクリチュールは、生き生きとした現前の抜け去った「本質的漂流」(『エクリチュールと差異』6)として、一度きりである現前の代わりに、何度でも繰り返し再認可能な一種の道具、技術として二次的な代補の地位に甘んじ、往々にして真理の現前を脅かすものとして断罪されてきた歴史を持つ。そこでデリダは、エクリチュールがパロールの単なる複製品ではなく、思考が文字で記録されるというあり方が知の本質に強く影響していることを示そうとした。パロールのみに頼ったソクラテス、そして書くことをパロールの代替としてしかみていなかったプラトンに始まるギリシャ哲学は、こうして脱構築によってそのままエクリチュールという文脈の中に配置されることになったのである。

エクリチュールとは書くことである。我々の

世界はどこが始まりでどこが終わりか分からないぎっしりと書き込まれた、エクリチュールの構成物である。書かれたテキストは、時に自分の欲望の対象であり、あらゆるものが混じりあった存在であり、何か意志伝達をしようとする目的を持つ。さらに、エクリチュールは、明確に意識化できていないことを書くという作業を含む。書くこととは、曖昧な部分を、その行為により、意識化しようとするエネルギーそのものである。曖昧な意識を表面に浮かべ、その断片を丹念に拾い集め、納得いく形に構成し、再びそれを書き直す。この点が、デリダの「ロゴスは、エクリチュールを超越しない」と言う所以である。伝えることがあり、それを伝達するために考案される体系はロゴスを現前させることを前提としている。ソシュール、フッサールに対するデリダの執拗な批判は、彼らの唱えるシステムが、このロゴスを我々が生きている世界に現前させようとしていることに向けられる。デリダによれば、こうしたロゴスは絶対に現在には現前し得ない。我々の目の前にあるのは、ロゴスの現前ではなく、その痕跡だけである。この痕跡とは書かれたテキストに他ならない。こうしてデリダの眼前に、テキストをその有限性のうちで思考することが必須であるという命題が置かれた。ソクラテス、プラトン以来のエクリチュールの抑圧の分析である。この抑圧は、外的な力を押し返したり排除する力ではなく、自己の内部に禁圧の空間を描く内的な表象を保有していた。この表象が、言語システム内の要素から発生していたという点は、注目に値する。何故ならば、言語システムは、置換機能それ自体において、絶えず自らずれを産出し、揺らいでいることになるからである。故に、きわめて精巧な言語システムであったとしても、まさにその計算可能性が差延により、計算し尽しえない結果を産出していくことと考えられ得る。

デリダにとって問題となるのは、エクリチュールが代補とみなされることではなく、それとの対比でパロールが純粋な現前を担うもの

とみなされる点にある。しかし音声記号が再認可能なものである以上、パロールもまた代補の一種に他ならない。そうであるならばパロールにおいて、純粋な現前が成立しているかのように考えられてきたのは、実のところ誤認であり、純粋な現前はすでにパロールに取って代わられてしまっていたと言える。これが「代補」と呼ばれる所以である。現前は代補なしには成立しないが、しかし代補によって成立する現前は、そのものとしての現前ではなく、それとは異質な代補が生み出す効果でしかなかった。ここから、代補は現前の可能性の条件であると同時に不可能性の条件であるという結論が導かれたのである。一方のエクリチュールもまた、パロールの代補に他ならない。デリダは、様々な理念性の形成に際して、エクリチュール概念がもつ多義性を、繊細に明らかにしてきたのである。エクリチュールそれ自体は、理念性やテキスト性を内的に結び付けているものを表象しているという点のみを考慮すれば、テキスト性は、エクリチュールのプロセスにより、最初の本来的な意味を限りなく純粋に伝達することを可能にしたと言えよう。

4. テキスト性について

デリダにおいて「本」という語りは、余りに完璧故に閉じられた全体、書き終って完全にできてしまった作品を意味する。あらゆるものが整然と区別、整理され、あらゆるものが、それぞれ、あるべきところにあり、しかも全体の中心に絶対的意味があり、全てがその中心をめぐって見事な存在秩序をなす。本は自足的であり体系的であり、自己自身の中で完結している。だが、現代はテキストの時代である。本が閉じられ、テキストが開かれる。本の幻想を捨てることは、幻想の源泉であった絶対的意味の否定を率直に認めることでもある。そして、この体験は現前の不可能性、すなわち書かれたテキストがアイデアを必然的に表象することは出来ないことの認識となり、一つのテキストを様々に読む事が出来ることの発見となり、アイデアという

テキストが指示する対象の排除となり得る。デリダはテキストの中に何らかの作用を及ぼすと考えられるテキスト外的な一切のものを、テキストの機能へと還元してしまう (*The Structuralists* 70-71)。

テキストとは、文学作品一般でもあり、宗教でもあり、心理学でも社会学でもある。それは言語の特殊な組織体であり、テキストを定義するとすると、まさにテキストそのものが不確定の状態になる。テキストは、独自の法則、構造、方法をもっており、それ自体として何かに還元されることなく研究されなければならない。テキストは思想を伝える道具である場合もあれば、社会的現実を反映するものでもあり続ける。時に、なんらかの超越的真実を具体化するものにもなり得る。テキストを作り上げるのは言葉であって、対象や感情ではない。この点から、ロシアフォルマリストは、言語学をテキスト研究に援用したのである。それは、実際に話されている内容ではなく、言語の構造に関心を寄せるものであった。さらに、形式を内容の表現とみることをやめ、形式と内容の関係を逆転させた。内容は、特定の形式を試みることを可能にする契機としかなり得ない。フォルマリスト流に見れば、『ハムレット』は、ハムレットという人物についての物語ではなくなる。登場人物は、いろいろな語りの技法を一つにまとめておく口実に過ぎないのではないか、という訳である。まさにこのような倒錯した主張故に、フォルマリストは、反対陣営から形式主義という蔑称を頂戴することとなったのである。ただし、彼らは、文字通りテキストが社会的現実と関係をもつことを全面的に否定した訳ではない。この技巧の集合体は、テキストの言語システムの中にある相互に関係づけられた諸要素、つまり機能とみられるようになる。技巧には、音韻、リズム、統辞法、韻律、押韻、語りといった様々な技法が含まれ、こうした要素は共通して異化効果を持つとされた。

文学テキストに限って言えば、それは文学的的技巧を駆使するという名目で、日常言語が凝縮

され、ねじられ、圧縮され、引き伸ばされ、転倒されたものとなる。文学テキストは異様なものにかえられた言語集団であり、異化により日常世界そのものを突如として見慣れぬものに変えてしまう。その目的は、言語そのものに我々の注意を劇的にひきつけることにより、慣習的な反応を新鮮なものにし、ものごとを見えやすくすることにある。しかし、それがいかなる場所でもいかなる社会でもいかなる時代でも異化作用を発揮するという保証にはならない。異化作用は、規範となる言語を背景にしてはじめて機能するものであり、規範が変わればその作用も停止せざるを得ない。換言すれば、フォルマリストたちにとって、テキストをテキストたらしめるテキスト性とは、複数の異なるディスカールの間に差異が機能している時に生ずるものであり、永続的に固定される実体ではない。結局、フォルマリストたちの試みは、言語の特殊な用法を定義することにとどまった。

この考え方は、構造主義へ移行すると当然修正を被ることとなる。我々にそれがテキストだと教えてくれるのは、複数の異なるディスカールの間に生じる差異ではなくコンテキストであり、言語それ自体の中に他の言語と区別するような内的属性や性質があるわけではない。つまり、人を驚かすような異化ではなく、自らを誇示しないような、リアリスティックな写実的なディスカールもテキストとなり得る。と構造主義では考えたのである。テキストとは、人間が文字表現をどう扱うかの問題である、と同時に文字表現の方が人間に何を働きかけてくるかの問題である。テキストは、直接的な形で実用的目的を果たさない、一般的な事柄について語っていると考えられるようになったのである。問題となる事柄は、現実はどういう人がいたかではなく、人について、今語っているのだというその語り方に気づいてもらうことである。語られている対象の現実性ではなく、語りに焦点を合わせるこのやり方は、後にテキストとは一種の自己言及的なシステムの一部だという場合によく引き合いに出されるようになる。テキスト

に分類されているものには、語られていることの真理価値および現実的妥当性の方が、全体的効果を生かすために重要であると考えられるようになったのである。

こうした意味合いから、テキストにはなんらかの内的特質もしくはそのような特質の一揃いが厳然と存在し、それを長い営みの中で生まれた特定の作品群に認めることができる、などという考え方は不可能になる。むしろテキストとは、人間と文字表現との関り方、その関り方の総体だと考える方が自然であろう。テキストという言葉は、なんらかの理由で、評価される種類の文字表現全体を指すものである。哲学者たちの物言いにならうなら、テキストも文学も存在論的用語ではなく、むしろ機能的用語であるという点で同類となり得る。この意味から、テキストとは、純粹に形式的かつ内容空疎な定義、そこにどんな意味でもこめられるような種類の定義に他ならない。

以上から、デリダにとっての文学は、多義性を抜きにして存立しえないことになる。彼によれば、文学とは「全てを言うことを可能にする制度」(『言葉を撮る 118』)である。これが含意している理由には、第一に、原則として万人に対して平等な発言権が保証されていること、第二に、現実や真理以外を語り得るフィクションの余地があること、第三に、表現の形式や内容の絶えざる革新があり、第四に、書物という媒体に立脚し、語る主体、またはコンテキストが不在であるが故に多様な解釈へと開かれたテキスト性があることが挙げられよう。この点で、デリダは、ロゴス中心主義の深淵に落ち込むことなく、テキストの諸々の閉域を脱することができるようになったのである。この経験こそが、デリダに対し、エクリチュール抑圧の挫折を脱構築の出来事として考える方法を与えたのである。テキストの開放は、閉域ないしその終わりを超えて、言語をディスカールから解き放ち、思惟を概念から解き放ったのである。

そこにどんな意味でもこめられるような種類の定義を持つテキストのテキスト性とは、当然

ながら常に不安定に晒されている。その不安定は、価値判断がつねに主観になるという理由からではない。不安定であるが故のギャップが、テキスト性の動きを支えているのである。価値判断の主観性に関する見解によれば、世界は整然と二つに分けられる。その二つとは、外にある堅牢なる現実と、内なる恣意的価値判断である。揺るがざる事実と、私的で客観的根拠を欠く価値。しかしながら、事実の陳述を皮むけば、そこには数多くの価値判断が潜んでいるのである。事実を述べるということは、とりもなおさず、それ自体に価値のあること、そうすることが他の行為より価値のあることを認めている証となり得る。つまり、パロールの中で大きな比重を占める価値は、伝達行為の中味ではなく行為そのものを強調する要素となる。この意味から、価値判断を全く欠く陳述的なテキストなどあり得ない、というテキスト定義にとっての大きな合意が生まれた。何が客観的で記述的なテキストなのかを決定するのは、価値のカテゴリーから成る不可視の網の目であり、テキストを構成している価値判断は、歴史的变化を被らざるを得ない。こうした価値判断は、社会的思想をはじめ、コンテキストと密接に関係している証となろう。価値判断の根源は信念の深層構造の中にある。テキスト性そのものを理解できるのは一重に、我々の社会生活を根底から変えなかり消えることのないものの見方、というまさにこの深層構造のおかげなのである。このようなテキスト性に関する見解は、後に集合体を作り、新歴史主義という様相を呈してることとなったのである。

5. 脱構築の問題点

不確定要素満載の脱構築の理論が不確定要素から始まり、理論としての理論、特に実践との二項対立に置かれるような理論にまとめられ得るかどうか、現時点ではまだ明らかとされていない。脱構築として、解決され得るべき残留点は、脱構築全体がデリダの「寄生」概念に寄りかかっていたことであろう。理論は何かの理論

であり、つまりそれが規制し処理し得る持ち場を必要とする。その適用領域は、視覚的なモデルに従う限りでは、ある意味で理論にとって「反対の」「向かい合った」ものとなる。しかしデリダの仕事は、必ずしも反対の、向かい合った仕事に従事しているものではなかった。むしろ逆に、彼の仕事がそれに依存して生きてきたかのような、宿主としてのテキストが現存している。これがデリダの「寄生」であったと言えよう。故に、寄生という点で、デリダのテキストと宿主のテキストとは分離することが困難になることが頻繁に起こった。文学批評を通しデリダに、このまま寄生し続けることが果たして正しいのか、その判断は難しい。彼について論じているつもりが、いつの間にかデリダの文体や概念に巻き込まれてしまい、デリダを論じていたはずが、デリダと同じようなことを繰り返してしまうだけの結果に終わることが、いまだに多々あるからである。

デリダの考える文学批評は、作品の唯一性と特異性を記憶にとどめ、それを考慮に入れようとするものであった。その際、その作品のために、その作品とは別のテキストが書かれ、読まれなければならない。ただし、取り出された骨組みを確認するだけでは、デリダの読解や思想の可能性を十分に汲みつくすことは難しくなる。何故ならば、デリダの理論の可能性は、論理そのもの際立った洗練よりもテキストを読むという行為の具体的な実践によって積み重ねられた定式の多様性にあると考えられたからである。故に脱構築とは、存在か無か、現実かフィクションかといった二項対立的議論に対して、定式の多様性を基礎に中間項を提示してゆく作業であったと言ってもよい。しかもそれは、度合いでしか示せない無数の項である。残された道は、このような定式の多様性の問いを、非言語的な領域へと拡張してゆく以外になくなってしまったようである。

また、デリダの示すテキスト外的な要素をテキストの機能に還元させる明確な身振りは、ある種の誘惑と特徴づけられたことで、そのよう

な戦略が依然として古典的な言説の制約内にとどまっている。つまり、ソシユールによる形式の優先と対極をなすデリダのテキスト外のテキスト機能への還元という概念は、明らかに形而上学的なひとつの原理に他ならなかったのではなかろうか。

6. 新歴史主義批評について

構造主義以降は、文学の研究が、デリダを中心に歴史的なものを強く排除するように変貌してしまった。デリダは、テキスト外的な要素をテキストの機能に還元させるべきであると考えた。我々が現前を捉えようとすれば、必ずそこに言葉が介在する。言葉が介在するということは、テキストが出てくるということになるが、言葉は言葉につながるだけで、その外側にある何かを表象 (represent) するわけではない。その観念から、書かれたテキストだけを分析すればいいという自閉的な方向が生まれたのである。しかし、その反動ともいうべきか、脱構築から逆らうように歴史に接近しようとする動きが出てきた。テキストはある主体の活動を通じて出てくるはずであり、その主体は社会的に構成されたものでなければならない。この前提があるにもかかわらず、テキストを歴史と社会から孤立したものと論じていくという発想には、限界があったのである。

脱構築と並走するように誕生した新歴史主義は、受容理論のリーダーレスポンスの流れを汲む。ベクトルがテキストのみならずリーダー側からも発せられるとした考え方は、文学のテキストの他に美術、経済誌、歴史資料などを並べ、それら全てが再解釈可能な要素を含んでいるのではないかという両方向のベクトルの存在を認める手助けとなった。脱構築の手法は、テキストを外側から転覆し破壊するのではなく、テスト内の変形可能性、変態の潜勢力によって内部から変形していくエネルギーに依存するものであった。新歴史主義は、テキストへコンテキストを持ち込もうとするエネルギーに準ずる。テキストはある主体の活動を通じて産出されるは

ずであり、その主体は社会的に構成されたものである。テキストの社会性並びに歴史のテキスト性を前面に出し、テキストは歴史の中に埋め込まれ、同時に歴史はテキストのように再解釈され得る対象となった。脱構築は、権力やイデオロギー⁽²⁾を開放したところで展開される思考やエクリチュールに忠実であり続けることであったが、文化と権力の問題を考えてゆく新歴史主義は、文学とコンテキストを較べ合わせながら、権力に対して直接に賛否を唱えるのとは別の仕方では、文学批評を展開していったのである。

批評家たちが、構造主義を看過しながら、脱構築を主眼とするポスト構造主義に対しては、大挙して敵意をもった原因のひとつは、脱構築が受容する差異が、伝統的な絶対概念と両立しないのみならず、弁証法の正統的論述とも矛盾するものであったことが挙げられる。そのため必然的に、脱構築は構造主義とはまた違った方法で、古典的マルクス主義と拮抗してくることとなった。当然、反マルクス主義の歴史も、マルクス主義の歴史も、双方がこの批判にさらされることとなった。しかしこの批判はまた、歴史を差異と記述する脱構築が、マルクス主義と新たな対話関係に入ったことを暗示するものでもあったため、ここから始まった差異の概念は、いかに新歴史主義に影響を与えてきたかを示すものとなったことも事実なのである。

新歴史主義は、脱構築同様、文化あるいはテキストの統一を否定した。しかし、新歴史主義は、文学と歴史の二項対立的な区分をも拒否してきた。新歴史主義は、文学も歴史の一部を構成し、非文学テキストあるいは他の文化的実践と相互に浸透し、それらのコンテキストになり得ると考えたのである。テキストそれ自体のみでなく、周辺のコテキストも全て、文化コードも容認し、一つの解釈の要素として見ようとするあり方である。一方、歴史的な証拠はマテリアルと呼ばれ、その唯物⁽³⁾的な確証、あるいは証明、遺物やドキュメント、歴史的なモニュメントなど、これは物理的、歴史学的、考古学

的な証拠があって、こういうことが言えるのだという確証を、新歴史主義ではコンテキストに配置した。その過程で、人間の精神から判断するというものは、全く排除されるであろうと考えられていたからである。

唯物史観的な社会は、観念の入る余地のない、例えば絶対精神やイデオロギーなどを全て排除した極めて物理的な構造を持つ。これまでは、歴史的事実が客観的に存在し、それが資料に映し出されているという見方であった。新歴史主義は、資料自体が歴史的コンテキストの中から生み出されたものであり、それを問題として取り上げる者がいて、そのような問いかけがあり初めて歴史が存在するという考え方に基づいている。それは、ある個別の事象を読むことに恣意性が強く介入することを回避できないという意識からの、科学性に対する願望であったのかも知れない。ある時代、ある社会の中で、人々の生存条件はどのように規定されていたのか、それは経済生産力や経済構造の問題であり、人口の再生産のしくみでもあり、社会階層の編成される過程を見ることでもある。世界の客観的諸条件と、その世界を生きた同時代の人々がどのように捉えていたのか、その関係でもある。

新歴史主義では、経済史、社会史、文化史、政治史という形で個別の次元を立て、それぞれの次元をあたかも建物のように積み上げる考え方をやめ、歴史の全体的な捉え直しをどう進めるか、という関心が中心となった。建物のメタファーで捉えられるような考え方が、唯物史観の上部構造・下部構造、経済への基底体制還元論と合致したわけであろう。

「間テキスト性 (intertextuality)」と言った場合、通時的なレベルに並んでいるテキストを共時的なレベルに置き換えてしまうことを意味する。つまり、様々な歴史的テキストを扱う場合、それらを同じレベルに並べ間テキスト性という枠組みの内部で分析していくのである。ただし、その場合に脱構築が鍛え上げた分析のテクニクを捨て去った訳ではない。新歴史主義は、脱構築の共時的分析を生かしながら、

それに通時的なレベルの問題を取り込もうとする試みであった。あるテキストをそのテキストの共時的な構造のレベルにおいて読み、社会の中での意味づけを読むと同時に、歴史的な出自の系譜学的な分析を重ねる。社会的、制度的なコンテキストがまずそこにあり、その中で研究者の知的な営みとしての試行錯誤がある。脱構築はテキストを分析することが営みであった。その中で、意味のずれが必然的に出てくる。そのずれをディスクールの内部で解釈して説明してしまおうとせず、そこで様々な意味が、ディスクール上でクロスしている、と脱構築では考えた。脱構築にとってクロスする地点は、最終的には意味が決定不能のまま、テキストからテキストへ、ディスクールからディスクールへ乗り換えてゆく所となった。新歴史主義では、そのずれで起こっていることとは意味の決定不能ではなく、そこでぶつかりあっている様々なディスクールを支えている権力間の衝突であるという発想が不可避だったのである。

それは文化の正統性の形成という権力の問題でもあった。権力問題を、文化が固定されたテキストの中だけに見るのではなく、様々な多義的なテキストの中に読みこむ。そうすることで、多面的なテキストを取り上げる一方、それを読む読者が属している集団並びに各集団間の権力の争いの問題が見えてくる、と新歴史主義は考えたのである。

7. 新歴史主義の問題点

新歴史主義の最大の問題点は、第一に、テキストを評する際に、様々な系列のテキストから、かなり恣意的に、時に強引に資料を引き出してしまふことが挙げられる。その場合、文化的なものを意図的に生産する側の、つまり一種の文化的なヘゲモニーを握る側の生産行為と、消費する側の生産行為との関係を、我々はどうのように考えてゆけばよいのだろうか。ヘゲモニーを持つ側のテキストと、ヘゲモニーの中に巻き込まれていく側の生産したテキストには、当然違いがあるはずである。文化の消費者と言われて

いる側でも様々な意味をこめて、テキストは読み取られる。それは、決して単純な受け取りではない。つまり、文化は簡単に生産と消費を分けられないのである。

第二に、新歴史主義が、従来のように文学作品を文学作品だけで読むのではなく、社会史研究や医学史、美術史の成果などと比較しながら、そのインターフェイスの部分を分析していく批評活動であるため、文化が非常に大きく揺れ動いていた時期に生み出されたテキストに、その研究対象が絞られることが挙げられる。その対象のひとつはルネッサンス期の、特に16世紀から17世紀にかけてのイギリスの文化研究であり、もうひとつは19世紀後半から20世紀にかけての自然主義文学の時代である。このように新歴史主義批評の大半は、批評の対象を、批評しやすいものに限定していく偏ったエネルギーを産出し、それを繰り返してきたと言える。

第三に、権力を担う主体の問題がある。マルクス主義のように単純にある階級に権力を付与して考えるのではなく、文化の問題を入れて考えれば、ある階級が持つはずのディスクールをその階級のメンバーが持つ場合と持たない場合が出てくる。逆のディスクールを持つ場合もある。階級のオーソドックスなイデオロギーと一体化してしまう部分と、そこからずれてしまう部分、換言すると、階級とイデオロギーが重なり合う部分とずれてくる部分があり多層化しているところに、権力の行使とそれを転覆させようとする権力の問題がどうからんでくるのか、この点での分析が新歴史主義は曖昧なまま、姿を変えることはほとんどなかったのである。

第四に、新歴史主義は、結局脱構築同様、通時的アプローチを疎かにしていることが挙げられる。そもそも批評家は自らのコンテクストに意識的に関わり、過去を記述する姿勢を、常に強いられていると言っても過言ではなからう。作品に書かれた過去、そして作品が位置する時代、そしてそれをテキストとして読もうとする現代に生きる我々。通時的視点から察するに、

テキストは、時間の感覚可能な現在として共存したことはなく、常にすでに過ぎ去ってしまった意味内容を含んでいる現前である、ということ。それは、過ぎ去ってしまったものの現前である。それは自我の同一性からすると「他なる現在」であるが、とはいえ我々が経験できる現前でもある。しかもそれは、単に経験し得るだけでなく、受容し、迎え入れ、招く、耐えることが強いられるような現前であり、自らの自己性の領野において、もっとも異質なものとして、責任を担わねばならない現前である。新歴史主義は、共時性が前面に押し出された結果が色濃く残り、歴史の通時性を間テキスト性の中に読もうと試みたけれど、くっきりとした輪郭を残すには至らなかったと言えるのかも知れない。

III 結 論

脱構築は、テキスト外テキストの通時性を否定した訳ではなかった。デリダは、過去、現在、未来という現前に立脚した時間性とは異なる時間性を示そうとしたのである。それは、決して現前しない仕方で、すでに生じたものが来たるべきものであり続けるという単独の出来事を指し示す時制である。デリダが数多くの自著で指し示そうとした概念もまた、差延に代表されるような、効果として生起しつつ過ぎ去っていく単独的な出来事だったと思われる。デリダの脱構築に残された行き先は、時間の概念を超えた認識なき外部、保証なき構造だったのかも知れない。

一方、新歴史主義は、脱構築と同様、通時性についての深い言及は、あまりなされてこなかったように思われる。新歴史主義は、脱構築で培われた共時性を生かし、それに歴史的な出自の系譜学的な分析を重ねる通時性を取り込もうとする試みが出発点だったはずなのに、である。また、新歴史主義批評には、文学テキストに関連した一方通行のベクトルに準じた批評が数多く存在したため、その側面から判断すれば、

確固たる主義とはなり得なかったのではないかと推測される。あるテキストとテキストとの関係性は、文学テキストから見えたインターフェイスのまま放置されたままと言うべきなのだろう。仮にテキストが全て、間テキスト性という性質を帯びているとしたならば、文学が採用してきた他分野からもまた、文学的資料を採用する両方向の批評活動が行われてしかるべきであったと思われるからである。新歴史主義が向かうべき先は、間テキスト性に立脚した時間的確認ある思考、保証ある語りだったのかも知れない。

〔註〕

- (1) 差延 (differance) とは、通時的ずれ (diachronic) と共時的ずれ (synchronic) の両方を同時に意味するデリダの造語であり、「痕跡」「間隔化」「代補」などと並んだデリダの鍵概念である。
- (2) 支配側の利害にとらわれたものの見方であり、自己または集団の立場を有利に展開しようとする意識形態、かつ科学的根拠のない観念形態のこと。
- (3) 唯物論 (Materialism) とは、ダーウィン、ハクスレーらに代表される観念であり、根源に科学的に証明できないものはおかないというもの。つまり、物事をさかのぼっていけば、必ず物質 (現在ではクォーク) にあたると考えるのが唯物論で、神に至ると考えるのが唯心論である。この唯物論と唯心論の対立は、自然と精神、世界と神、存在と思考など、様々な形で提起されてきた。唯物論においては、世界を理解するにあたり、物質的なものを根源的なものとみなし、物質とは無縁な、靈魂、意識、精神を認めず、実証科学の成果に基づいて、意識や思考というものを高度に組織化された特定の物質の所産と考える。従って、唯物論は、我々の意識から独立した客観的実在 (物質) を認めると共に、我々の認識を、精神の自由な創造としてではなく、頭脳による客観的実在の反映、模写として理解する。

〔参考文献〕

- Abrams, M. H. *The Mirror and the Lamp: Romantic Theory and the Critical Tradition*. Oxford University Press. 1971.
- Crews, Frederic. *After Post-Structuralism*. Northwestern University Press. 1993.
- George, Richard T. De. *The Structuralists: From Marx to Lévi-Strauss*. N.Y., Anchor Books. 1972.
- Greenblatt, Stephen. *Learning to Curse: Essays in Early Modern Culture*. London: Harvard University Press. 2007.
- Vesser, H. Aram. *THE HEW HISTORICISM*. Routledge: Chapman and Hall, Inc. 1989.
- White, Hayden. *Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press. 1993.
- . *The Practical Past*. Evanston: Northwestern University Press. 2014.
- バルト、ロラン (渡辺淳・沢村昂一訳) 『零度のエクリチュール』みすず書房 1991. (Barthes, Roland, *Le Degré zéro de l'écriture*, Seuil, 1964.)
- カラー、ジョナサン (折島正司 他訳) 『ディコンストラクション I』岩波書店 1998. (Culler, Jonathan, *On Deconstruction: Theory and Criticism after Structuralism*, Cornell University Press, 1982.)
- デリダ、ジャック (高橋允昭訳) 『ポジション』青土社 1981. (Derrida, Jacques, *Positions*, Paris, 1972.)
- (堅田研一訳) 『法の力』法政大学出版局 1999. (Derrida, Jacques, *Force de loi. Le "Fondement mystique de l'autorité,"* Galilée, 1994.)
- (鶴飼哲・大西雄一郎・松葉祥一訳) 『友愛のポリティクス』みすず書房 2003. (Derrida, Jacques, *Politiques de l'amitié*, Galilée, 1994.)
- (林好雄訳) 『声と現象』筑摩書房 2005. (Derrida, Jacques, *La Voix et le phénomène: introduction au problème du signe dans la phénoménologie de Husserl*, PUF, 1967.)
- (藤本一勇訳) 『哲学の余白 (下)』法政大学出版局 2008. (Derrida, Jacques, *Marges de la philosophie*, Minuit, 1972.)
- (港道隆・鶴飼哲・神山すみ江訳) 『言葉を

- 撮る デリダ／映画／自伝』青土社 2008.
(Derrida, Jacques and Fathy, Safaa, *Tourner les mots : au bord d'un film*, Galilée, 2000.)
- (合田正人・谷口博史訳) 『エクリチュールと差異』法政大学出版局 2013. (Derrida, Jacques, *L'écriture et la différence*, Seuil, 1967.)
- (西山雄二・郷原佳以・亀井大輔・佐藤朋子訳) 『獣と主権者 I—ジャック・デリダ講義録』白水社 2014. (*Séminaire : La bête et el souverain volume 1 (2002-2003)*, eds, Michel Lisse, Marie-Louise Mallet et Ginette Michaud Galilée.)
- イーグルトン, テリー (大橋洋一訳) 『イデオロギーとは何か』平凡社 1996. (Eagleton, Terry, *Literary Theory: An Introduction*, Blackwell, 1983.)
- 枝川昌雄 『テキスト理論と精神分析』洋泉社 1987.
- ホークス, テレンス (池上嘉彦 他訳) 『構造主義と記号論』紀伊國屋書店 1990. (Hawkes, Terence, *Structuralism and Semiotics*, University of California Press, 1977.)
- 伊藤直哉 他 『現代文学理論』新曜社 2000.
- 加藤周一 『サルトル』講談社 1984.
- 久米博 『現代フランス哲学』新曜社 1998.
- レントリッキア, フランク (山淳彦訳) 『ニュークリティシズム以降の批評理論 上』未来社 1993. (Lentricchia, Frank, *After the New Criticism*, University of Chicago Press, 1981.)
- 岡本靖正 他・編 『現代の批評理論・第1巻 ~物語と受容の理論』研究社出版 1998.
- 他・編 『現代の批評理論・第2巻 ~構造主義とポスト構造主義』研究社出版 1998.
- 他・編 『現代の批評理論・第3巻 ~批評とイデオロギー』研究社出版 1998.
- 高橋允昭 『デリダの思想園』世界書院 1989.
- 富原芳彰・編 『文学の受容』研究社出版 1987.